

歩きながら考える

—広島・岩国、豊橋・浜松、京都、福岡、ハノイ、前橋、そして、福島—

開倫塾

塾長 林 明夫

Q：2月から3月にかけて、あちらこちらに行かれたそうですね。広島・岩国には何をするために行ったのですか。

A：(1)2月3日(金)は、幹事を務める公益社団法人経済同友会(東京)の米州委員会(委員長、多田幸雄 双日総合研究所顧問)主催の岩国基地視察のためです。海上自衛隊航空部隊と米国海兵隊航空基地を視察しました。

(2)前日の2月2日(木)夕刻には広島に行き、広島平和記念公園の原爆ドームも視察しました。

Q：広島・岩国で考えたことは何ですか。

A：(1)広島・岩国では、平和の尊さと、日本国や北東アジア地域の安全を守ることの大切さを実感しました。オバマ大統領が広島を訪れ、世界の核軍縮を高らかに宣言してから1年も経たないうちに、トランプ大統領の言動が世界各地の紛争を誘発しています。特に、北東アジアの緊張を今までになく極端に高めています。

(2)このようなときに、岩国基地の日本と北東アジアの安全保障に果たす役割は、今までにも増して大きくなっていると考えました。

Q：豊橋・浜松には何をするために行ったのですか。

A：(1)2月7日(火)に、公益社団法人経済同友会(東京)の地方分権委員会(委員長、市川晃 住友林業社長)の三遠南信地域(豊橋市・浜松市)の視察に参加するためです。佐原光一 豊橋市長、鈴木康友 浜松市長、神野吾郎 サーラコーポレーション社長とも懇談、意見交換をしました。

(2)三遠南信地域は、愛知県豊橋市(三河)と静岡県浜松市(遠州)、長野県飯田市(南信州)の3つの市が中心になり、35市町村圏域で県境を越えての産業振興・インフラ整備・人材育成などの地域提携を進めています。

Q：豊橋・浜松で考えたことは何ですか。

A：(1)全国各地には、この三遠南信地域以外にも、県庁所在地から離れてはいるが、隣の県の市町村との地理的・経済的・文化的・歴史的関係が極めて強い地域が数多く存在します。国や県の日、具体的には国や県の「予算」の多くが県庁所在地にまわってしまい、県庁所在地から遠く離れた県境と呼ばれる地域にあまり配分されないのが現状です。

(2)そうであるならば、この三遠南信地域のように3県の県境の市町村が民間を中心に連携

を強めて、調査・研究・政策提言を含む地域づくりを推し進めるべきと考えます。

Q：京都には何をするために行ったのですか。

A：(1)2月8日(水)に、公益社団法人経済同友会(東京)のイノベーション・エコシステム委員会(委員長、野路國夫 コマツ会長)の京都大学吉田キャンパス視察に参加するためです。

(2)京都大学では、新設の国際科学イノベーション棟会議室にて、京都大学産学連携本部、京都大学発ベンチャー企業の「京都創薬研究所」、「FAI テクノロジー」、京都大学イノベーションキャピタル、産学連携プロジェクト(COI プログラム)の概要説明をお聞きして意見交換をし、施設見学を行いました。

Q：京都大学で考えたことは何ですか。

A：(1)昨年(2019)の12月5日(月)に、山形県鶴岡市の鶴岡メタボロームキャンパスを同委員会で視察し、慶應義塾大学先端生命科学研究所(IAB)、IAB 発ベンチャー企業「ヒューマン・メタボローム・テクノロジー」鶴岡市先端研究産業支援センター関係者の皆様と意見交換をさせて頂いたときと同様、日本の発展・成長は民間と大学、政府、自治体4者の連携による「イノベーション」の創出なくして考えられないと実感しました。

(2)京都大学や慶應義塾大学のような最先端の基礎研究とその研究者を民間企業や国、自治体が総力を挙げて戦略的にバックアップしない限り、日本の発展・成長に直結するイノベーションは生まれないと考えます。

Q：福岡には何をするために行ったのですか。

A：(1)2月22日(水)、23日(木)に、同じ経済同友会イノベーション・エコシステム委員会の九州工業大学・安川電機・九州大学の視察に参加するためです。

(2)この視察でも、九州工業大学・安川電機のロボット村・九州大学を訪問し、研究開発の動向、大学発ベンチャー、ベンチャーキャピタルの活動状況、産学連携の推進状況等について、現場見学と意見交換を行いました。九州大学の有機EL(エレクトロ・ルミネッセンス)の材料開発の視察は圧巻でした。

Q：福岡で考えたことは何ですか。

A：シリコンバレーやイスラエル、インドのバンガロールなど、世界の研究開発のイノベーション拠点と競争し、勝ち抜くには、大学と企業、国、自治体が一体となり、戦略をもって行わなければ、グーグルやアマゾンには勝てない。国の基幹産業であるシャープや東芝などと同じ運命を辿ることになると痛感しました。

Q：前橋には何をするために行ったのですか。

A：(1)2月28日(火)に、メンバーの一人である群馬経済同友会の地域問題委員会・首都機能バックアップ検討委員会に参加するためです。

(2)首都圏直下型の大震災が発生した場合に、首都機能をバックアップするために群馬県として果たすべき役割とは何かを、2011年3月11日の東日本大震災の経験を踏まえて4年間に

わたり調査・研究・報告書の取りまとめをしているのが、本委員会です。

(3)群馬経済同友会のメンバーだけでなく、地域の大学や研究所も参加している本格的な委員会で、地域の経済界の活動としては他に類を見ません。

Q：前橋で考えたことは何ですか。

A：(1)2011年3月11日の東日本大震災から6年が経過しましたが、同規模か、それ以上の規模で首都圏直下型の大震災が発生した場合、人々の生命や財産を守ることと同時に、どのように首都機能を維持するかは、日本のみならず世界の大きな課題であることは明白です。

(2)そうであるならば、群馬経済同友会で行っているような首都機能バックアップのための検討が、首都圏を取り巻く神奈川県、静岡県、山梨県、長野県、栃木県、埼玉県、千葉県各県の経済界でも戦略をもって、また、ベクトルを一つにして行われて当然と考えます。

(3)この群馬経済同友会の取り組みが、そのきっかけになればと考えます。

Q：ハノイには何をするために行ったのですか。

A：(1)3月4日(土)と5日(日)に、ハノイのイオンモールベトナム・ロンビエンで開催されたJETRO主催の「健康長寿広報展」の開会式とその視察、第31回グローバル・サービス実践INハノイで北川JETROハノイ事務所長と日系進出企業関係者講演会として、EIKOベトナムとスポーツジム大手のルネサンス・ベトナムの代表者の方々からお話をお聞きし、意見交換をするためです。

(2)グローバル・サービス実践塾は、1月まで30回にわたり東京で開催、今回はベトナムでの初めての開催でした。世話人の一人である私は、司会を務めさせて頂きました。

Q：ハノイで考えたことは何ですか。

A：(1)フィリピンと同じく、ベトナムの人口も9000万人を超え、日本と同じ1億2千万人に迫る時期もそう遠くはないようです。国民の平均年齢もフィリピンと同じく30歳以下で、若者で溢れ返っている国といえます。

(2)小学校が極端に不足し始め、1クラス80名で、午前と午後に分けて授業を行っている学校もあるほどです。

(3)2年前にできた、この最先端のイオンモールにある日本食レストランは、土日はどこも満席で、日本への関心は極めて高いように思われました。ただ、日本食のレストランであるにも関わらず、日系企業の進出は少なく、とても残念でもったいない気がしてなりませんでした。

(4)ハノイ市内でも日本食は大ブームなのに、日系企業が少ないようで、知れば知るほど、日本のサービス産業の伸びしろは大きいのに、何をしているのだろうと思えてきました。

Q：福島へは何をするために行ったのですか。

A：(1)3月8日(水)に、10年前より理事長を務める、福島市内にある学校法人有朋学園有朋高等学院の卒業証書授与式に列席して理事長祝辞を述べ、卒業生・保護者・地域社会・教職員の皆様とともに卒業のお祝いをするためです。

(2)この有朋高等学院は、中学校や高校で不登校であった生徒が高等学校の全課程を通学しながら修了するための小規模の高等学校で、1学年30～40名、1クラス15～20名です。

(3)卒業式は、2人の高3クラスの担任の先生が名簿を見ることなく、全員のフルネームを一人ひとり呼び、校長先生が一人ひとりに卒業証書を直接手渡すという、感動に溢れるものでした。

Q：卒業生に伝えたいことは何ですか。

A：高校の勉強は、大学に入学してからも、また、社会に出てからも、すべて役に立つ、一生役に立つもの。ですから、高校の教科書と教材、ノートは決して処分しないで、一生の宝物として身近に置き、折に触れて学び直すことです。

Q：2月は随分あちらこちらに行っただけですね。最後に一言どうぞ。

A：(1)世界各地に出掛けるときには、「地域の歩き方」(ダイヤモンド社刊)がとても便利です。

これに加えて、例えばハノイであれば、JETRO 刊の「ハノイスタイル」(JETRO、ビジュアルで見る世界の都市と消費生活)が、今月のお勧めの1冊目です。このJETROの「○○スタイル」シリーズは60以上の都市や地域について刊行、数年おきに改訂されていますので、ご活用をお勧めします。

(2)2冊目は、平沢健一著「アジアビジネス 成功への道ーグローバルからグローバル・アジアの時代へー」産業能率大学出版部 2016年6月30日刊です。この本は、アジアの国別にキャノン中国の小澤秀樹社長はじめ日本からの進出企業の代表の執筆もあり、極めて有益です。

(3)3冊目は、フレッド ボーゲルスタイン著「アップル VS ゲーグルーどちらが世界を支配するのかー」新潮文庫、新潮社 2016年2月27日刊です。これからの世界の流れを決定するであろうプレイヤーの2社の本質がよくわかります。

是非、御一読を。

ー 2017年3月9日林明夫記ー